養蠶農家は語る

長野、山梨兩縣下における座談會記錄

〔御斷り〕當研究所ではかねて研究中の問題と關連して、二月から三月にかけて農業關係主要輸出品の實態調査を實施した。その中で計畫部の愛甲、馬場、齋藤、宍戸、恒松の調査班は、製絲業及び養蠶農家の調査を目的として、長野、山梨兩縣下の一部製絲工場と農村を廻つた。關係者の御好意で、各所で適切有效な座談會をもち、農家や關係者の卒直な意見を豐富に聞くことが出來た。所定の計畫に從つて實施した各般の調査の成果は、かくの如き意見をも參酌して出來る丈早い機會に纏まつた報告書として公にし度いが、かにかくに、今聞いて歸つた現地生產者の切實な聲の一部を、その餘韻の殘つた儘に記錄して大方の參考に資したい。

一、鼎村にて

日時　昭和二十四年二月十九日

場所　長野縣下伊那郡鼎村農業協同組合

出席者

研究所側　愛甲(A)、馬場(B)、齋藤、中山、宍戸(S)、恒松

村側(敬稱略)　鷲見　鼎村日農組合長、縣農地委員

水野　元農業會理事

木下　農民組合委員、養蠶組合副組合長、農協理事

矢澤…縣農地委員、農協理事、農民組合常任委員

小川…養蠶技術員

竹村…農事研究會會長、養蠶生產費調査農家

新井…養蠶農家

櫻井…耕地整理事務所事務擔當者

鷲見(球)…果樹技術者

a　今回の調査の目的についてお話願いたい。

A　調査の目的は、今回の單一爲替レートの設定に關連して日本の將來を考え、政治的面を全く離れて純經濟的立場より差し迫

つた問題を究明するための實地調査である。そのために、研究所としては、輸出面に重要な地位を占める生絲を中心として、養蠶製絲兩部面の生産費を調査するために、長野・山梨・群馬三縣を對象として選んだわけである。その方法として實際に養蠶家・製絲家の實情を視、廣く意見を聞くと共に、輿論調査と戸別調査を併せて參考資料としたい。そこで戰前と現在と比較して收繭量はどの程度低下しているか。

a　最盛期の三分の一程度には少くとも落ちていると思うが、研究所のあなた方は實際に觀察されてこの地帶を養蠶地帶と思いますか。

A　他の土地とは一見して異うと思う。

b　最盛期では畑地は殆んど桑園であつたが、戰時中より戰後にかけて主食の增産のために止むなく桑を拔いた。それが現在では爲替レートの問題がある爲に、貿易としての生絲の重要性を認めながらも新植補植を躊躇している狀態である。

c　吾々の村では食糧の生産は自給のため、皆が努力していることは勿論のこととして、現金收入をふやす方法として養蠶以外に目ぼしい手はなく、やりたいと思つていても將來性が不安で行き惱んでいる。

d　然し吾々養蠶家はもつと目覺めなくてはならない。というのは、從來は唯蠶を飼うことにのみ專念していた。然もその不眠不休の努力の結晶である繭は製絲業者に安く買い上げられ、最も大きい利潤を搾取されていたのだ。此の點を考えなくてはならぬ。

e　蠶種の問題にしても、製絲業者は自らの利益のために養蠶家の經營を無視して、一代交雜蠶種の奬勵をし、無理に押し付けて來たような面が極めて大きかつた。

S　その點、ここには組合製絲があるのだから、惠まれているのではないか。

d　いや、どうして！　惠まれるどころか、組合製絲は全く民主的でなく、一部ボスの專斷に委ねられている狀態だ。

S　然し民主化しようと思えば、出來るのではないか。

e　いや、それが出來ないのだ。形としては組合製絲であるが實質は企業製絲と全く變りはない。例えば、繭の買付けに際しても、その價格の決定について、農家に繭檢定の技術的知識がないために、一方的のものになつてしまつている。上伊那の組合製絲と比較しても、水引きが大きく見積つているために、價格が安くなつている。とにかく、吾々が搾取されていることは事實であつてそのため天龍社を分割して吾々の手に取り返そうという話も出ている位だ。

d　組合製絲があまり大きくなり過ぎたことが民主化を阻んでいるのだ。

S　事業規模が大きいから民主化出來ない、小さければ民主化出來ると云うことは言えない。又組合製絲を分割して小規模のものを多く造ることは、生産過程の凡ゆる面から見て不利ではないか。

e　そう言われればそうだ。然し現實に吾々は搾取されている。吾々はその搾取されている利潤部分を取り返したいと思つている。

f　それよりも吾々は今後どういう行き方をしたら良いのか、それが一番の問題であると思う。

A　戰前盛んであつた時代の養蠶と現在の養蠶とでは國際市場の狀況から見ても、その他色々の條件について見ても、大きな相違がある。國内的に見ても戰時戰後を通じて經濟外事情によつて多くの改變があつたが、今後はむしろ經濟的理由からもつと深刻に色々變化して、世界經濟の大勢に順應してゆくであろう。例えば、主食との關係がそうだろう。吾國の現狀から見て、今より四年後に於てもなお四百萬トンの食糧の輸入は不可避であろう。この他、國の經濟復興に必要な多額の生産財も亦輸入に俟たねばならない。それらの莫大な輸入代金を賄うために、生絲を出來るだけ高く輸出することは、吾國の立場からは當然の要請なのであるが、それにも拘らず、之が日本だけで解決出來ないところに、皆の惱みがある。このような事情を皆さんも良く知つて置いて頂きたい。

c　生絲は米麥作と異つて、桑樹・蠶種・蠶・繭・製絲・織物と多くの段階を經過するものであり、此の時間的問題も考慮に入れて考えなくてはならぬと思う。

e　吾が國民は現在衣料には相當の不足を來している。生絲を先ず國内消費に充當し、その餘剩部分を品質を優良にして輸出するのが當然ではないか。それを安くしてでも輸出しなくてはならぬということは、之こそ飢餓輸出であつて、日本人の生活水準を引下げることに役立つのみではないか。

f　現在この邊の輸出關係は一體全體どうなつているのか。

B　現在綿紡が純受取六千萬ドルで第一位、生絲は四千五百萬ドルで第二位である。勿論大部分は米國向けである。今飢餓輸出という言葉が出たが此の言葉はあまり感心しない。というのは、現在のところ貿易は管理貿易であり、昨年六月迄に生じた八億ドルの入超も占領地救濟資金で支拂われている狀態である。言わば吾々の飢餓を救濟して貰つた輸入代金は、全くクレヂットに頼つているのが實情なんだ。更に輸出能力の點から見ても、輸入物資は一ドル一三〇圓、輸出は三三一圓が一ドルという換算であるが、このことは取りも直さず吾國の生産力が低下していること、言いかえれば、それだけ輸出能力が低下していることとなる。然も、現在輸入している物資は、日本の産業復興上絶對必要なものなのである。だからどうしても輸出能力を上げることが要請される譯である。

e　そうすると以前の如く低賃金に甘んずるということになる譯ですね。

B　低賃金と云うのは生産力が低下しているからである。現在は確かに賃金は安い、然し製品當りの原價から言えば、賃金が高くなつている。勞働者も樂ではないが、企業家にとつても得な狀態ではない。搾取されているとすれば「低能率」そのものに搾取

されている形だ。

e　日本が米國から高い物資を輸入してそれに加工しているということは、今後の問題として不安に思えるのだが。

B　日本の現在の工業生産の能率は昭和五乃至九年に比較して約一五パーセントに低下しているのであるが、此の能率低下が、どこから來ているものであるかを考えて貰いたい。

f　要するに、吾々養蠶家として、如何にして生産力を上げ生産費の低い經營をして行くか、又出來る見込があるかが問題である。

e　それはそうだが、大切なことは、かかる經營を行い得たとしても、その輸出までの行程に於て、從來の如く、資本家の搾取が行われてはならないということだ。それは兎も角、一三〇圓と三三一圓との開きある貿易は、日本の國力の消耗であり、之は貿易を行えば行うだけ甚だしくなると思う。

B　そうではない。現在のレートだけから言えば、一ドル一三〇圓で入れて之が加工過程を經ているうちに、能率が低いために三三一圓で一ドルという勘定になつて行くのである。こういう狀態では一人前の貿易はできない筈だ。それでも貿易がとにかく行われているのは、クレヂットのお蔭だ、まだ一人前の顔をして損得を言える狀態ではない。一人前になるためには、生産力を上げることだ。そして現在の輸入も生産力を上げるための輸入なのである。

f　何故生産力が落ちているのか。

B　基礎資材・原料・副資材等生産材の不足が最も大きい原因である。昨年生産力が上つたのは、石炭・鐵鑛石等の輸入が增したためだ。ここで必要な資材の輸入が增せば生産力は上る筈である。

e　アメリカから輸入している小麥の價格は幾何になつているか。

B　現在のところ救濟資金によつて賄われているが、弗建價格を國内の公定に換算すれば、一ドル一八八圓位のレートになる。之を一ドル三三〇圓で換算すれば割高となる。しかし之は高く輸入しているということではない。ところでこういう割高の計算になるのは、米國政府が援助物資として一括して買い付けている爲に高値を示していることと、爲替レートが圓安になつているためである。將來援助をうける必要がなくなる頃には價格も下るであろうし、爲替レートも圓高になるであろうから、今よりは安く輸入することも可能となるであろう。

e　いや、そうは思われない。日本はどうしても輸入しなくてはならぬのであるから、不利でも高い價格で買わざるを得ないであろう。その場合、日本政府は吾々國民からは安い價格で食糧を買い上げ、高い輸入食糧とつきまぜて、適當な價格で國民に配給するのではないかと思う。現在の日本の政府ならば、國民を苦難の道に追い込む如き政策をやり兼ねないだろうと思う。

B　どうも一方的な考え方だ。ただここで注意したいことは、外國で高い小麥であつてもそのまま日本へ入つて高くつくとも言

えないし、又安いものでも高くなることもある。それは爲替相場次第だ。假に將來、小麥が高くなつても日本の工業生産力が上つていれば、爲替が圓高になつて高い小麥が割安に入つて來ることになるではないか。然も戰後のことでもあるから食糧はだんだん安くなる傾向にあると思う。そして爲替もだんだん圓高になるだろうから、むしろ將來の問題としては、安い外國食糧との競爭のことを考えるべきだ。そのためには、農業の生産力を上げることだ。日本の政府を攻擊するより生産力增强を考えて欲しい。

A 色々面白い問題もあると思うが、今後の桑園增植の問題に就てどう考えるか。

a 食糧との競合問題が大きい。政府は桑園の間作にも主食の供出を割當てるような施策を行つている。一體吾々は何を主體として、農業を續けて行くべきか判斷に苦しむ。

b 之は食糧調整の面に於て技術的にも何とか出來る問題であると思う。

e いや、そうではない。强制的割當が現實に存在するのであつて、調整の面ではどうすることも出來ぬ。

f 之に關しては作付轉換の問題も起つて來ると思うが、それは後の問題として、之位で本座談會を散會としたい。(恒松制治記)

二、飯田にて

日時　昭和二四年二月二〇日

場所　長野縣蠶業試驗場飯田支所

出席者

研究所側　愛甲(I)、馬場(B)、宍戸(S)

試驗場側　場長U　試驗場員C他五名

養蠶篤農家A他二名

場長紹介　挨拶の後

場長　皆さんお寒い所を御苦勞樣でした。單一爲替レート設定に伴い養蠶農家の間で色々な迷いが出ているらしく、昨年以來繭の增産の意慾は非常に上つて來てはいるものの、仲々思うような增産になつていない。養蠶業の將來についてどのようにお考えですか。

I 私達がこの深い山にかこまれた伊那谷に入つて來てみて、深く感じたことは、このような村で農業が成立するためには何が金に變る作物を作るという以外には多くの人々を養うことが出來ないという事であつた。換金作物という場合にそれが賣れてしかも所得が生産費を償うかどうかということが問題になるのであつて、生絲のような場合は外國に賣れるかどうかという事が第一の問題となる。

場長　確に繭の場合は國內消費の米の場合と異なり生産コストをどの位引下げ得るかということが繭生産の切實な課題となる。私の考えでは反當りの繭增産による生産費の引下げ、即ち桑園能率の向上が第一の解決策であると思う。研究所側のお考えはどうですか。

I 一口に生産費の引下げといつても、反當生産力、勞働生産

力の向上を始めとして、その他の費用の色々な條件を考え合せて始めて一つの結論が出るのであつて、これさえあればという萬能藥があるわけでなく、色々な條件の組合せをいかにするかというのが我々の問題となる。爲替一つで物事が決まるわけのものでもない。

C　單一爲替レートの決定はどういう風に農業に影響するでしようか。

B　爲替というものは國と國との物價水準の高さ低さを調節する役目をはたすものですが、その水準の相違があんまりひどくなると爲替のたてようがなくなる。物價に應じて爲替がきまるのだといえると同時に、爲替がきまるとある國の物價が他の國に波及していつて、その間にある高さの水準がきまつてくるともいえます。そこで一方の國がインフレにでもなると、他の國では爲替を通じてそのインフレが自分の方に波及してきては困るので、爲替を遮斷しておいた方が都合がよいことになる。現在の日本は、そのインフレのために、他國、主として米國との間で、爲替なしの貿易をやつています。日本から輸出する場合は政府が國内の價格で買取つて、これと關係なく國際價格でうつている。輸入の場合には國際價格で買入れて、これに關係なく、國内價格で拂下げている。政府は採算を考えないで貿易をやつている。しかも巨額の入超を行つている。採算を度外視して入超をやつているというと大した經濟力をもつているように聞えますが、實はこれは自力でやつているのではない。米國のクレヂットに賴つてやつていることです。クレヂットがなくなれば、とてもこんな營はできません。ところが御存知のようにクレヂットは早晩なくなるはずのものなので、その時の準備のためにも、その時までに爲替が手放しに行われるようにしておかなくてはならない。この頃、問題になつている一本レートも本當の意味の爲替ではなく、いわばそれへ移つてゆくための過渡的な措置である。

現在、輸入品の平均レートは一三〇圓、輸出品の平均レートは三三一圓であるといわれているが、新しい單一レートといつても單純に輸出入の平均をとるというわけでなく、大體輸出の平均レートに近い處できまるのではないかと思う。そうなると輸入品は今迄一ドルのものが一三〇圓で拂下げられたのが急に三三〇圓程度になるかというと、そうではない。そうなつては國の經濟の安定なり發展なりに悪い影響がおこるからである。

輸入品の半分は食料であり、四分の一が鐵鋼、石炭という基礎資材であり、後の四分の一が棉花、羊毛などの加工原料である。そこで輸入レートを引上げる。つまり國内へ拂下げる價格を引上げるということは、食料の値段を引上げることによつて賃金を上昇させ、基礎資材が値上げされることによつて輸出産業の生産コストを高め、輸出を引合わなくさせる。食料が上るということは農家にとつては好都合と思われるかも知れないが、國民經濟全體の再生産條件はそういうことを許さないのです。

一口に單一爲替レートの決定といつても、その影響は品目によつて一樣ではない。輸出品の中には、例えば生絲のように三三一

圓という平均レートでは、引合わないということがおきる。そういうものには暫定的には補給金を出すということが一部でいわれている。生産能率の低下した我國の産業で輸出を振興するにはどうしても現在の低下した能率を引上げなくてはならないが、これは今すぐできることではない。援助すれば能率があがる見込のある、重要な輸出産業には暫くは何等かの形で補給金を出して、その生産力を高めさせねばならないのではないかと思う。しかし補給金といつても「價格差補給金」であるとはかぎらない。輸出商品に政府が補助金を出して價格を安くして輸出振興を行うということは貿易憲章の精神にも反するし、又外國における競爭相手であるナイロン等の會社にも反對されるおそれがある。しかし完成品に對して直接補助金を出すのでなく國民經濟の安定、農業經濟の復興という線でその生産過程においても生産條件を改善し、從つて能率が上つて、生産費の下がるような手段を政府の手で行なうということは、筋の通る考え方だろうと思う。外國の迷惑にならずにすむような經濟力を養うためにすることでもあるから「生産補助金」ならば差支えないのではないかとも思われる。生産のどの段階に、どこにどんな施策が行われれば能率が上り、生産費が下るかという點をお聞きすること、が、我々の調査の目的である。

A それでは急激な經濟狀態の變化はないものと考えてよろしいか。

B それは「急激な」という程度の問題でもある。一本レートの設定によつて生産能率を向上することがどうしても必要であるという意味で、大きな變化である。しかし何らの手もうたないで一本レート設定による影響を野放しにして、まだ弱い日本の經濟を國際的競爭にさらすのではないと思う。たた、いまのまま日本の經濟を國際的競爭にさらせば大變なことになる。競爭に耐えるような力を養うための一方式が單一爲替レートの設定でもある點を考えると、何でもかでも一本レートを手放しで行なおうというのではないと思う。

二四年度の計畫では輸出五億弗、輸入九・五億弗となり、その差額四・五億弗が米國からのクレヂットで賄われる。これを全部一弗三三〇圓位のレートで換算すると一、五〇〇億圓の財政收入となり、それだけ通貨が收縮してインフレはとまるという考えも出てくる。これが一本レートを野放しにした場合の結果でもあるが、生産が上らないで通貨收縮だけが行われれば所謂飢餓恐慌となる。そこでクレヂットを活用して必要な輸入物資を餘り高い價格でなく國内に流して、基礎資材を經濟的に供給し、人件費を低下させて生産能準を上げ生産力を増し輸出を振興することの方が大切だといえる。通貨收縮だけを考えず、ある程度のインフレは忍んで生産の向上によつて「結局において」經濟の安定を齎らそうとする。つまり米國が金を貸して呉れている間に混亂を回避しながら生産力を上げてゆこうというのが現在の方向であると思う。

場長 繭生産費の引下げの方法として、第一に桑園能率の向上

を考えている。昔は川路村のように反當四〇貫の收繭量だつたものが、現在では一一貫という數字になつている。之を昔にまで戻せば生産費はずつと下ることとなる。それには肥料をやることだが、現在のような高い金肥では駄目だから、專ら自給肥料に重點を置くように蠶試としては指導している。戰前桑葉八〇〇貫とれていたが、現在のままでも配給肥料を全部桑園に入れればまだまだ反當收繭量は上ると思う。試驗場の桑園には配給肥料だけだが現在桑葉量五五〇貫、上繭にして二五貫の反當收量がある。

B　二五貫取れれば米を作るより現在でもよいのではなかろうか。

A　實際はそうなんだろうが、戰時中、終戰後食料一本槍で進み、今まで肥料がなくて困つたため反動的に水田へ肥料を投じた。一昨年は桑へ來た肥料は全部水田へ入れたが、昨年からはそれでも桑へ三貫か二貫五百は入れたろう。

水田への增肥はもう限界まで來ている。昨年水田へ反當六貫八百やつた。桑の方は增肥すれば飛躍的に增産出來る。今後肥料が增配されれば、增配しただけ桑へ投ずるだろう。

S　老齡の桑は現在のままで肥料をやるだけで桑園能率は上りますか。

場長　試驗場としては、現在のままの桑樹では完全な桑園能率が發揮出來ないから、改植補植をすすめている。

C　繭を出せば米と取換えられるという風になればもつと增産出來るだろう。何といつてもまだ食料問題の方が農家の關心が强い。

A　それと同時に繭の價格が相當高く維持されることが必要であつて、今度繭が五六〇〇掛になつたことは養蠶農家の增産意慾を非常に强く刺戟した。米と繭との間の適當な價格ということが必要條件だ。

場長　現在養蠶業は赤字だと思う。原蠶種を作る養蠶家は貫一、五〇〇圓から一、六〇〇圓だから收支償うだろうが、普通の養蠶農家ではだめだろう。製絲家はそれに對して赤字ではない。この點を考えて貰いたい。

A　報償物資にろくなものはない。天龍社の還元物資がまあまあ使える位の物たろう。

S　稚蠶協同飼育はどうですか。

D　桑園能率を上げて生産費を下げると共に、稚蠶協同飼育又は壯蠶共同飼育によつて勞働生産力を引上げる必要があると思う。又畜力を桑園に入れることも勞働生産力を高めるために必要だと思う。

E　稚蠶共同飼育は戰時中の勞力資材の不足のために促進されたものであるが、現在も稚蠶共同飼育で浮いた勞働力は稻作に投ぜられている。農林省は稚蠶共同飼育場の助成金を出すそうだが稚蠶專用桑園の設定にも助成が欲しい。現在縣費で稚蠶用共同桑園に反當五〇〇圓の助成金がでているが、もつと多くの助成が必要ではないか。又農地改革によつて共同桑園設定がかえつて困難になつている現狀である。蠶室の共同化と同時に農地委員が桑園

の共同化を認めるようにならなければならぬ。その他稚蠶共同飼育の利點としては、何といつても稚蠶共同飼育による蠶作の安定の效果は著るしい。

S 壯蠶共同飼育をどのようにお考えですか。

場長 最後の上簇まで共同でやるという本格的な壯蠶共同飼育は困難であつて、ただ晩秋蠶等で各戸五瓦位を桑園の殘葉で飼うといつたような場合に、部落共同で飼うといつたものが可能である。何しろ大きくなつてからは場所的に困る。

E 戰時中と異り稚蠶共同飼育とか畜力利用といつても、勞働生産力を上げた場合の餘剩勞力をどうさばくかということが問題になる。あまつた勞力で農村工業の如きものを起すということはこの伊那谷では困難であろう。

B そのためには矢張り工業の回復ということが重大な問題になる。場長が前に肥料が高いとおつしやつたが、その肥料は生産費が一〇〇圓のものを政府で四〇圓補助して農民に渡している現在で、なお高いといわれるのは、いかに日本の工業生産力が落ちているかということが分る。

C 現在の工業の生産力はどんなに低下しているのですか。

B 日本の工業力はやつと戰前の生産力の六〇%に達したといつているが、勞働者は最盛期の昭和一九年一千萬の時から二百萬位しかへつていない。戰前に較べてかえつて殖えている。それ故能率からいうと五〇%位である。

A 私自身の問題になるが、私の經營は水田一町四反、畑六反であつて、從前とも生産費の引下げの方向として機械化し、畜力を入れて、大經營にしたいと思つて來た。しかし農地改革によつて經營の擴大化は阻止された故、大經營による合理化が困難になつた現在、どのような方向に向えばよいか。

D 農地改革後の經營合理化の上昇の限度はどうであろうか。又經營の共同化によるコストの引下げをどのようにお考えか。

I 經營の擴張は確かに好ましい事だが、それにはあまりにも村が狹すぎ、人口が多い。方向としては出來る出來ないというのでなく、どうしてもそうならなければというのがあると思う。しかし共同化そのものにも難點がありこのような山間部では特に困難であろう。共同化の條件の適應した所から始めるというより他はない。機械化といつても、それによつて浮いた勞働力が遊んでしまつては何にもならない。

E 鼎村の土地の共同管理では、桑園の反當二〇人の勞力を共同化によつて一二人にへらし、それを果樹に向けようといつている。

場長 桑で浮かした勞力を果樹に向けるというのも一つの考え方だが、逆に飯田附近では果樹はもうだめだからと拔いている人もある位で、實際の所、現在の農民は將來に對して定見がないという他はない。

D 爲替レートの問題で現在養蠶農家の增産意慾が頭打ちの形だが、私の經驗ではこの伊那谷では他作物への轉換ということが出來ない。地勢的自然的條件からすれば、關西の方がずつとよい

にも拘らず、長野において養蠶の盛んなのはやらざるを得ないからであつて、技術的に自然條件を克服して始めて可能になつたのであると考える。

S　生絲が十四中から二一中への轉換は養蠶技術としてはどのように御指導なさいますか。

場長　上伊那の絲は能率本位で、良質でなく二一中に向きに出來ている。下伊那は戰時中の航空一號という特殊絲のために技術を傾倒し、良質の十四中向きのものになつている。試驗場としては適當な方向にそれぞれの特質を生かして行くつもりである。

ここの試驗場は蠶を中心とした經濟的な問題を中心にした研究機關になる豫定である。現在、その一つとして有畜農業と蠶の問題を取上げ、役牛を入れホルシュタイン二頭、その他緬羊を入れている。桑園の中耕、除草を畜力で行い、勞働力輕減の問題を研究している。又乳牛と蠶の關係では、一頭の乳牛に對し今まで一反乃至一反五畝の飼料が必要だといわれていたが、代りに桑園の殘桑と蠶糞蠶滓でやつて行くことを奬勵している。長野蠶業試驗場では桑園三反で乳牛一頭が飼えるという強い說を說えている人もある位だが、今の桑園では少しむりであろう。しかし長野縣五萬町歩の桑園で八百萬貫の殘桑がとれることになる位である。しかも今までは霜枯れ殘桑は肥料として使つたわけだが、肥料價値はあまりなく、サイレーヂとして良好である。このように養畜と養蠶の結びつきは仲々面白い問題であるが、現段階では緬羊が養畜として適當であろう。乳牛は又勞力の問題で蠶と競合するから自家勞力とにらみ合せて考えなければなるまい。

S　養蠶農家への試驗場技術の浸透はどうですか。

場長　蠶絲業において蠶業試驗所の技術の農家への浸透の問題は、農業に比すれば個別的な技術的高度さを特に必要とする養蠶業だけに、農民は技術に對して必死であり、技術浸透の問題は農試に比らべれば良好である。

E　農業の技術員が責任をもつていない所に技術浸透がないゆえんであつて、共同飼育場では技術員が全責任を負つているし、養蠶家も技術員に信頼を置いているから、本當の共同飼育が出來るのであつて、もし運作などあると、技術員としては村にいたたまれない程のことになる。技術の結びつきも、技術者の先覺的意氣込によつて始めて可能になるのではなかろうか。

I　色々と有益なお話を聞かせて頂いてどうも有難う御座いました。

（宍戸壽雄記）

三、豐村にて

日時　昭和二四年二月二三日
場所　山梨縣中巨摩郡豐村村役場

出席者

縣廳…蠶絲課、星野技師(H)
縣蠶業技師指導所…大原技術員(O)
研究所…愛甲(I)、馬場(B)、宍戸(S)
村…村長、協同組合長、養蠶實行組合長他二〇名

西吉田養蠶實行組合長（A）
澤登養蠶實行組合長（C）
農業協同組合長（D）

H　わざわざ東京から調査にこられたのであるから、腹藏なく遠慮のない話をして貰いたい。

I　此度の調査の目的は、我國の貿易が通常の形へ戻るために單一爲替というものがきまつて、近いうち實施されることになるのであるが、果してその場合養蠶農家がどのようになるのであろうかということである。養蠶、製絲共にその成立條件が國内のみで決めることが出來ない。それ故、養蠶農家の一番重大な關心事は、今度の爲替の決定で、現在の養蠶農家の增産の意氣込が打擊を受けるのではないか、ということであろう。我々の考えでも養蠶の前途はそう樂觀出來るものではない。

我々の調査の結果がすぐ實效を現わして、養蠶農家へ肥料が增え、補給金が出るということにはならないだろうが、我國の養蠶業がどのようにすれば復舊出來、立上ることが出來るか、ということを學問的に追求して行く我々の努力が、大きな目で見て相應の結果を生み、それが廻り廻つて皆樣方の手元へ戻つて來るということになれば幸だと思う。

豐村は戰前耕地面積の九五％までが桑園であつたものが、二二年には二五％にへつているが、この轉換の結果變つたものは食料作物ですか。

A　この村は、戰時中も大分終りまで殘つていたのだが、二〇年の桑園の全面的整理で食糧に轉換した。二一年まで殘つていたのは勞力の關係で拔き切れなくて殘つた分である。終戰直前まで一所懸命に拔いたので、終戰の話を聞いてあわてて各農家に一時拔くのを見合せろといつて廻つた位だつた。

H　村の食糧は村で自給しろという時代で、主食でも軍用でもない櫻桃等は格こうの換金作物であつたが、これ迄も切つた時代である。換金作物には殆んど變つていない。

C　此處の土地は水田が一筆もないという土地柄故、百姓でいながら食料に困り、桑の殘つた畑も他の作物を作つても出來ないから殘したようなものだ。勞力がなくて拔き切れずに根元から切つて麥を作つた人さえある。

A　ここでは終戰後も食糧事情から桑を拔いたもので、戰時中命令がなくともあのころの食糧事情では拔いてしまつただろう。ここの土地は御覽の通りの砂礫地で、食料は三〇％しか自給出來ず、自家食料保有農家は一軒もないという村である。昔は野菜さえ購入していたもので、飲料水は五〇尺以上掘らねば出ず、毎年のように旱害に惱まされている。桑でさえ八年位たたねば一人前にならぬという土地である。實際は此の村では桑とか果樹のような深根性のものでないととても農作物の出來る所でない。

D　適地適作ということが稱えられているが、この村では養蠶において始めて生産力が發揮出來るのであつて、現在は食糧事情のためやむなく麥を作るという實情である。麥で反當三俵という低度の生産力であるし、又麥の裏作に「キビ」「アワ」を作るが夜

盗蟲にやられて收穫皆無ということが多い。

村長　桑園にすれば米麥の供出がないということになれば、まだ大分桑園は增えると思う。

A　或村では繭一〇貫以上出すと、米、麥の供出をへらすというのもあるが、この村では桑を新植しても全然供出割當をへらさない。縣でも初年度は三分の一、次年度三分の二という風に食糧供出をへらすことにはなつているが、村に來ると切迫した食糧事情のため桑を植えたからとて供出をへらしてはくれない。

E　反當收繭量を決めて、米の代りに供出させる綜合供出制をとれば、豐村としては一番好都合である。食糧供出は今後どうなるだろうか。

I　安本五ヵ年計畫でも、五年後に四百萬トンの輸入食料を必要としている。今後食料問題は幾分輕減されることがあつても、完全に皆樣のおつしやるような矛盾が是正されるということは無理だろう。しかし適地適作主義で全國的に生産力を高め、能率よく土地を使うという方向に進みつつあることは疑ない。

村長　事實食糧に引ずられて桑を拔いたのではあるが、もし繭の値を早く引上げたら戰後も桑を拔くというようなことはなかつたろう。繭が一貫目四五圓位の時に桃は三〇〇圓位していたのだから。繭の㊙か安くてヤミに流しにくいことが桑から轉換した最大原因だ。

D　しかし五六〇〇掛が五〇〇〇掛になつたからとて、桑の代りに麥やさつまを作りますというわけにはこの村では行かないだろう。麥は作つてもとてもよそ程には出來ない。

村長　爲替が圓高に決まると掛目を落されるという恐があるか。

B　落すとか落さないとかいうことは決つていない。しかし現在の五六〇〇掛というのは米とのパリティによつて決められたのだが、一般に基準年度として取られている昭和九―十一年平均というのは不當に繭値が安かつた時であるという理由で大正一〇年―昭和五年平均がとられている。もし之を九―一一年ベースにとると、米とのパリティ計算をすれば四〇〇〇掛以下になる。これからみると繭のパリティ價格は例外價格であるといえよう。之は能率の差からこのような措置がとられたので、米麥の場合は反當で戰前の九〇%の生産力であるに反して、繭は六〇%に落ちているからである。繭のパリティ價格といつても所得的なパリティを政策的に考慮して決められたものである。

E　米の値が上り、繭の値は下るという樣なことはおきないか。

B　米の値が上るにつれてそれだけ爲替は安くなるならば、繭の値が高くなつても輸出出來るという風になるはずだが、米價と爲替レートの間にはこのような關係はないから、何らの手もうたずにおけば繭と米とのパリティは維持できなくなる。しかしそれでは困つた影響がでるので、何らかの手がうたれるのではないかと思う。

A　しかし實際は繭の方が他作物に比して割に合わないように決められていると思う。稅務署の査定にしても生産費に全然ヤミ

が入つていない。他のものはヤミで肥料を入れた代りにヤミで流せるが、繭ではそれが出來ない。

E 今でも桑はもうからんから、肥料をやらんで麥にやるのだ。

D 割か合わなくなればナスでも作るかということになる。

C しかし昭和四、五年頃の繭値一圓三十錢から二圓十錢という不況の頃で、繭を賣るのをやめて、釜無川に捨てたという話があつた時でも、矢張り繭を作つた。養蠶という投機的な要素の強いものでも、この村のような宿命的な土地柄のために桑を植えたのである。只現在のように國家において食料を保證して呉れない時代——昨年で五十日位缺配し、今年でももう十日遲配している——には仕方なく桑を拔くということになるのだと思う。

A 確に五六〇〇掛になつてこのまま繭値が維持されるにしても、他所では桑園を增やさないだろうが、此村では蠶座紙を除き新調することなく前の資材を使用するから復元が樂だ。蠶箔でも一ケ二五〇圓位するから新調するとなると大變だ。

村長 外國の生絲相場が上る見込はないか。

B 現在二・五五弗というのは一年位は据置かれるだろう。又現在の日本には生絲の値を左右するだけの力がない。一昨年四・二五弗當時は滯貨して困り、伊太利の生絲が三・五〇弗だつたので、大體三弗を一寸上廻る程度に決まるだろうと思つていた。所がナイロンが丁度その頃値を引下げたので二・四五弗という所に決まつたのだという話である。現在ナイロンの生產者價格が一・八〇弗というのだから、生絲相場の値上りは難かしかろう。

一昨年は生絲は四・二五弗、繭は二六〇〇掛という値のため、一弗一七〇圓という圓高だつたが、昨年は繭が五六〇〇掛になり生絲は二・四五弗となつたため、生絲の爲替レートが弗四二〇圓となり問題が難しくなつた。

A 繭を五六〇〇掛で買つて弗が三五〇圓位に決まつたら製絲業者はどうするのか。

B 製絲業者は經營の合理化による二〇%位の加工費の節約を餘儀なくされる。しかし政府が之に對し手放しているわけではないと思う。財政支出の形で補給金を出して暫くの間經營の合理化までの時をかせがせるほかに道はないことになろうと一部でいわれている。

C 農林省の意向は繭を買つて外國から小麥を買う方向か、それとも食料の自給の方向か。

I 實際の所ははつきり決つているといいきることは我々には出來ない。蠶絲局では繭を重視し、食管では主食に力を入れるというのが打明けた現狀であろう。研究所としてはそのような場合に、米と蠶との間にどのような兼合いの點を見つけるかが課題である。安本の復興計畫というのもそういう點に重點が置かれる。蠶の方が有利だから蠶をやり、米が有利だから米をやるというのでなく、安かろうが高かろうが蠶を作ろうという八〇萬の農家が死活の問題として存在していることを無視して政策はたて得ない。米、蠶、その他の作物が綜合されてどのような生產力の綜合的向上が考えられ得るかということが問題となる。

E　食料はヤミがなくなれば自給出來るという說があるがどうか。

B　ヤミがあるということはヤミに隱れるべきそれ相當の經濟的理由があるからで、そのヤミがなくなるだけの經濟的な條件を作つてやるのでなければヤミはなくならない。ヤミがなくなれば自給ができるというのでなく、輸入食糧を加えて、ある程度供給が安定してくればヤミが少くなるのである。そして自給力もあがつて來る。日本の經濟が落着いてきても四〇〇萬瓲の食糧輸入が必要であるといわれているが、四百萬瓲の輸入能力ができればヤミがなくなつて實際の輸入はもつと少くてもよいことになるのだと考えることは出來る。

A　農家としては蠶と食料の綜合供出が望ましい。繭を食料に換算すれば麥三俵取れる所が六俵取れることにもなる。五六〇〇掛の維持よりも、綜合供出にする方が復元は早いと思う。

H　綜合供出の問題は一方からすれば綜合計畫の必要性のことである。山梨縣でも綜合計畫委員會に於いて食料、蠶絲、畜産等々の部會を設け、綜合計畫の策定に努力している。

D　この村では桑苗一六萬本を新植し二〇町の桑園を增したが本年度の食料の供出がへる所でなく却つて增加した。植えさせる時は食料の方の供出は縣で何とかして貰うといつて奬勵した手前非常に困つている。綜合した計畫の下にやつて貰わないと蠶絲の方も食糧の方も勝手にいいことをいうから農民は困る。

A　村では食糧調整委員會が農業調整委員會に變つて一種の綜合計畫が出來る體制になつたのだから、上部組織においてもそのようにやつて貰いたい。

I　山梨縣のみならず各縣で綜合計畫又は復興計畫の委員會が出來て、そのような方向に進んでいると思う。增産々々というために農家にしつくりはまつた形にならぬことは、現狀として認めねばなるまい。

村長　繭には今度から第二種事業稅がかかるが、供出した物にまで事業稅をかけるというのはけしからん。

A　稅額は僅少だが農家に與えた影響は大きい。今年はそのためか繭のヤミ流しが非常に多い。

村長　掃立てた蠶種の瓦數に對して稅金をかけるため、蠶種もヤミで買うという譯が多い。

S　肥料の配給はどうですか。

村長　縣では桑の反別と繭の供出量とに半々の割で割當てるのですが、村では全部反別割當にしている。昨年で八貫八〇〇匁位でしよう。しかし桑にはやらずに麥へ廻すのが普通だ。五六〇〇掛になつてからは大分桑にやるようになつたが。

F　桑の肥料は有機質がないとまずいので、この村のように藁が全然ない所では大家畜を飼うわけにゆかず、堆肥が全然出來ないので〆粕、大豆粕のようなものが欲しい。

C　昔は仲々澤山肥料をやつたもので、電報一本打てば北海道の鰊が何車でも伏木經由で村の倉庫に入る位、大量に買つていたものである。最盛期には夏に反當四〇貫多に三〇貫もやつたもの

だ。

A 報償物資も、もつと報償の趣旨にかなうものが欲しい。

H 今年は綿製品が大分多いようだが。

A 自家で絹を織つていた頃には銘仙みたいなものを呉れるし裏作に棉を作つて大分自家用の綿製品が出來る頃になると、綿製品を配給するといつた具合に、どうもズレがあるから困る。現在農家で一番欲しいのはゴム製品だろう。

D この村では耕地面積三三〇町に六〇〇戸という平均反別五反という零細耕地故、多少でも現金收入を得るために桑以外には方法がない。私の計畫では五ヶ年間にこの村の耕地の三分の二を桑園にするつもりだ。昔は長野縣あたりからの漂泊勞力を多數雇入れたものだが、現在では殆んど自家勞力である。三分の二が桑園になつた時も勞力は自家でまかなえる豫定である。

E 現在私の家で晩秋に二人頼んだら、普通の日傭賃金は平均一日一五〇圓たが、養蠶の場合はつらいからとて三〇〇圓を要求された。このようでは雇傭勞力は一寸無理だ。

F この村では昔は桑條だけで燃料に事缺かなかつたが、今では私の家など一萬圓位燃料を買わねばならない。

O 實際このようにどうしても養蠶の必要な村というのは、全國にそうざらにあるものとは思わないが、このような村に對しては相當した手段を打つて頂きたいと思う。

I 重要なポイントを押えての增產こそ、單なる一般的な增產よりも有效であると私も信じている。

（宍戸壽雄記）